

と見えし、これ秋といふ名の始て見えし所歟、されどこれは後世に名づけられし所也ともいへり、私記の說總て太古の事の徴とすべきにもあらず、又二神共に速秋津彦速秋津姫の神を生給ひ、陽神に速秋日子神を生給ひしともみえたれば、延喜式の祝詞には、速秋津姫の名を、速開都比咩ともえらるされしかば、是も漢字を借用ひられし時、其語たま／＼相同じければ、秋の字を用ひられしかど、其實は春秋といふ義には、あらざりしもえらるべからず、正しく春秋の秋の事と見えしは、舊事紀等の記に、日神、天熊大人命、葦原中國の稻種をとらしめ給ひ、天狹田長田は植給ひしに、其秋垂穗八握、莫然しと舊事紀にえらるされしぞ、まがふべくもあらぬ秋の事也ける、是後素盞鳥神の御孫羽山戸神の子に、若年神、夏高津日神、また夏之女秋比女神、冬年神等ありきと舊事紀にみえしぞ、夏冬の名の見えし始也、されど古事記には、冬年神を久々年神とえらして、久々の二字を讀に音をもてすべしと注したれば、舊事紀にみえし冬の字は誤寫せし所也とみえたり、又舊事紀に思兼神の兒表春命、下春命みえたり、これも春秋の義也しにや、たゞ其字借用ひられしにや、不詳、此等の名義既に闕ぬれば、今はたいかにも辨ふべからず、もし古語の例によりて其義を推求なんには、古語にハラクといひしは開也、春を名づけて、ハルといひしは、年開ぬる義にて、たとへば漢に開歲などいふがごときか、夏とは熱也、アツをナツといひしは、轉語にて、其炎熱の時をいふなるべし、古語にアキといひし事のごとき、速秋津姫また速開都咩とえらされし例によらば、これも開の義にや、取ぬらん、義不詳、又舊事紀に、飽昨之宇斯能神といふとみえたり、さらば百穀既に成て、飽滿アキミるの義にもやあるらん、溟渤讀てオウウミといふを、オホキウミともいひ、滄海原讀てアヲウナバラといふを、オホウナバラともいふによらば、アキとはオキの轉語にて、大の義にもやあるべき、さらば百穀既に成をもて、其時を大也とする也、日神、葦原中國を豐葦原之千秋長五百秋之瑞穗國とのたまひしも、此義なるべし、冬とは冷也、ヒユをいひてフユといひし